

取り止めとなり、高等科は耕地の暗渠(あんきよ)排水工事の勤労奉仕に従事。このとき諏訪の子ども達は本来二部授業で登校するようになつてしたが、学校まで来るのは激しい空襲等で大変なことから、ほとんど登校して来なかった。

#### ●縁故疎開

一方、知人や親類を頼つての縁故疎開では綾瀬にも相当数が訪れ、そのため教室内は初め52～53人であつたものの、昭和19年は68人くらいになり、最盛期には85人にもなつて歩く所もないくらいに増えた。

縁故疎開者は2～3年綾瀬に居住した。

#### ●終戦を迎えて

そうした中で、昭和20年8月15日の正午、ラジオからの玉音放送は終戦を伝えた。

そのとき宿直室等に集まつてラジオの前で耳を傾け、それまで日夜がんばっていた先生方が肩を落し、号泣する先生もいた。

敗戦は、地元や疎開の子ども達に恐怖と

不安を与えた。

先生達は、そうした児童を説得したり、励ましたりしながらの多忙な生活をしばらく続けなければならなかった。

こうして、約1年2カ月に及んだ集団学童疎開であつたが、疎開学童は少しづつ落ち着きを取り戻す中で引き上げ準備が進められ、昭和20年10月1日には、集団疎開児童の帰校送別会が開かれるに至つた。

こうした日本の教育史上、いまだかつてない学童疎開という体験は、戦後の学校教育をはじめ、その後の生活に大きな影響を残した体験であつた。

